

特別講演：現代家族の多様性—国際比較調査から—

渡辺 秀樹

慶應義塾大学文学部

現代家族の特徴を、国際比較調査の結果から考えてみたい。紹介するのは、国立女性教育会館によって、2005年に実施された家庭教育に関する6カ国調査である。0歳から12歳の子どもを持つ親を対象としている。日本・韓国・タイ・アメリカ・フランス・スウェーデンの6カ国。各国およそ1000人、父母は約半数ずつである。

〈現代家族の多様性〉には、二つの意味がある。

ひとつは、家族が時代や社会（国や地域）によって多様な様相を示す、ということ。6カ国比較調査でいえば、国ごとに家族の特徴が異なり、それが、現代日本の家族のあり方を相対化して捉えることを可能にする。また本調査は、10年前の国際家族年を記念した調査（日本女子社会教育会=現・日本女性学習財団によって実施された）の継続調査であり、10年後の変化を見ることができる。

ふたつは、多様性を軸にして各国の家族を比較してみると、多様な家族のあり方を許容する社会と画一的な家族のあり方を求める社会が見えてくるということである。本報告の主旨は、この後者における多様性に注意して現代家族を見ることにある。6カ国調査では、子どもの将来の家族ライフスタイルについて問うている。さまざまな家族ライフスタイルを認める国と画一的な家族ライフスタイルを求める国が対比的に鮮やかに現れる結果となった。

家族の多様性は、たとえば、家族の多様なあり方を許容する社会が少子化に歯止めがかかっている、というように少子化との関連で議論される。しかし、議論はそれにとどまるものではない。これまでも、画一的な家族規範が家族問題の生起（児童虐待や介護問題や養育問題など）に関わることがあると議論されてきている。個人と家族と社会との関係の多様なあり方を認め、社会がその具体的な対応をはかることで、人々のニーズのよりよき充足が可能となると考えられる。本報告では、上記の国際比較調査の結果のうち、子どもの将来に望む家族ライフスタイルについての項目とともに、子どもの養育に関わる項目、とくに父親の育児に関する項目を紹介し、家族社会学の立場から検討を加えたいと考えている。

参考文献：

- 渡辺秀樹、2008,3、「家族意識の多様性—国際比較調査に基づいて」、『社会学年誌』（早稲田社会学会）、49号、pp39-54。
- 原礼子・渡辺秀樹ほか、2008,4、「座談会：少子高齢化時代の多様な家族のあり方」、『三田評論』（慶應義塾大学出版会）、pp10-23。
- 国立女性教育会館、2006、『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』。
- Makino, K., Watanabe, H., et-al, 2007,11, "International Comparative Study on Fathers' Child Care," *NCFR 69th Annual Conference (Pittsburgh)*.